

「私は厳しいので、覚悟して実習に臨んでください」－これは初日に私が指導教諭に言われた言葉である。この言葉の通り、毎日修正の繰り返しや厳しい指導で心が折れそうになったことは多々あった。自分が今まで人から注意されたことがない英語の発音や文字の書き方（板書）など、実際に授業をしてみると、穴だらけであることが浮き彫りになり、それらの改善についても試行錯誤の日々だった。しかし、厳しく指導して頂いたお陰で、教師という仕事は生徒と関わって単に「楽しい」というだけでなく、責任感をしっかりと持って取り組まないといけないことが痛いほどわかった。

3週間で32時間授業させてもらえたので、1発勝負の授業はなかった。同じ授業を3回ずつするので、必ず修正を加えていくように心がけた。しかし、生徒にとってはどの授業も1度きりだ。よい授業をするためには、徹底した教材研究、そして教師が幅広い教科知識を身につけて置くこと、この2つが大前提となってくることを学び、自分の教科知識の浅さを痛感させられる毎日だった。「教師の仕事の中で授業が占める割合は3割ほどだが、生徒にとってはそれがすべてだ」と指導教諭から教わった。もちろん、授業以外でも生徒と関わる場面はあるが、私は教師の基本である「授業」の腕を磨いていくことの重要性を強く感じた。「どれだけベテラン教師になっても、よい授業をしようとする努力を怠ったら教壇に立つ資格はない」とも指導教諭以外の先生から教わった。学び続ける姿勢の大切さも学び、充実した3週間だった。